『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

第三六回　光華講座

晴れた日には永遠が見える

――現代に伝える仏教――

京都女子大学
清基秀紀

はじめに

はじめまして。清基と申します。ただいまご紹介に預かりましたように、私は、浄土真宗本願寺派、西本願寺の末寺に生まれまして、ずっとそこで育ってきました。現在、京都女子大学で仏教学を教えております。もちろん寺の住職もしております。本願寺の国際センターというのがございまして、ちょうど家の前にあるのですが、そこで、仏教聖典を外国語に翻訳する事業にも関わっております。英語への翻訳はもう何十年と続いているわけですが、ブラジルにも開教してお

りますので、ポルトガル語に翻訳するという事業もありまして、それにも関わっております。毎日、あっち行ったりこっち行ったりで、それなりに変化があって楽しい生活です。

寺は西本願寺のすぐ近くにあります。四百年前に現在の西本願寺の土地に本願寺が移ってきた時に、いわゆる御堂衆というのですか、本願寺のお仕事をするために寺内に土地を与えられて住み着きましたので、四百年前から今の場所におります。門前町というのはお寺があってその前に自然発生的に町ができるわけですが、寺内町というのはもともと本願寺の土地にできた町です。そういう土地に育っておりますので、本願寺界隈は私の庭のようなもので、西本願寺も東本願寺も私の遊び場でした。東本願寺の堀でザリガニをとって守衛さんに怒られた子供のころの思い出もございます。

そのような環境におりましたので、一度外に出てみたいと考えました。真宗の勉強はいずれできるだろうから、その前に自分の好きなことをやってみたいということで、英米文学を専攻しました。ところがやっぱり寺の子ですね。いったん外に出ますと、真宗に対する興味が強くなりまして、英文学の卒業論文を書きながら独学で真宗の勉強をしまして、龍谷大学の大学院に入れて頂きました。ところが、いきなり大学院から真宗の勉強を始めますと、これはものすごく難しいんですね。専門用語だらけです。しかも独特の省略の記号があったりします。

カタカナの「サ」という字の下にカタカナの「サ」と書いて「菩薩」なんです。菩薩というのは画数が非常に多いので、黒板に書くのに時間がかかりますから、「菩」の最初の〝くさかんむり〟と、「薩」の〝くさかんむり〟、それを二つくっつけて「菩薩」の略号にするわけです。辞書

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

を調べても出てきません。専門用語の多さもあって、なかなか難しいなという意識が非常に強かったですね。

その最初の時の「これは難しいな」という印象が非常に強く、やはり大事なことは、易しく、人に分かるように伝えるということが大切なんじゃないかという思いが強くなりました。それで、易しく説こうという意識が非常に強くなったわけです。

宗教教育

――京都女子大学の場合

現在、京都女子大学で仏教学を教えていますが、やはり易しく分かりやすくというのが心にずっとあります。京都女子大学は西本願寺系の学校ですので、仏教学が必修になっております。必ずとらないと卒業はできないわけですが、学生にとっては、本願寺系とは聞いていたけれども、仏教学をとらないと卒業できないとまでは知らなかったようで、驚くわけです。「どうして仏教学をとらなきゃいけないの？」という気持ちの学生たちを講義に惹きつけていくことが大事になります。あまり難しいことを伝えて、やっぱり難しいなということで仏教嫌いにしてしまっては、その子たちがせっかく仏教に出会う機会を奪ってしまうことになりますから、できるだけ仏教に対して良いイメージを持ってもらいたいという気持ちで教えています。

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

京都女子大学が西本願寺系であるのと同じように、この京都光華女子大学も東本願寺系の女子大学ですから、ちょうど同じような立場にあると思います。そういう中で、現代の若い子たちにどのように仏教を伝えていけばいいのかということは、共通の難しい問題だと思います。

しかし仏教というのは、単に学問として、知識として知るだけではなくて、人間形成として大事なことであるという信念があるからこそ、必修科目にしてみんなに仏教の教えを伝えていこうとしているわけです。京都女子大学の場合でしたら一回生の時に「仏教学Ⅰ」というのを学びます。これは釈尊のことです。インドでお釈迦様がどういう教えを説かれたのかということ、日本で宗派に分かれる前の段階のことを学ぶわけです。そして「仏教学Ⅱ」というのが三回生の時です。親鸞聖人の教えを学びます。そのように、二年間にわたって仏教を学びます。

これは必修科目としてはボリュームが大きく、いろいろなことが伝えられます。そのなかで、宗教教育も力を入れております。講義だけでなく、月に一度、講義の時間を礼拝の時間に振り替えております。前期に三回、後期に三回、礼拝堂に集まって、そこで仏様の前でいっしょに仏教讃歌を歌い、その後にお話を聞きます。いろいろな先生に、人生について考えることや、その先生の宗教観などを話していただきます。それは礼拝の時間の半分くらいで、後の半分はそのお話を受けて私たちが仏教と結びつけて話をします。そういう時間というものは学生たちには非常に貴重な時間のようで、そのような機会がなければ、なかなか人の話をじっくり聞くことがないんですね。普段の講義だとざわざわすることもありますが、礼拝堂ではピーンと張りつめた雰囲気があります。仏様の前ですと、ちょっと違った気分になり、背筋を伸ばしてお話を聞くようで

す。ですから学生たちは、そのようなかたちで話を聞く時間を持てたことを非常に喜ぶわけです。その期待を裏切らないようにしなくてはなりません。また、いろいろな先生にお話をして頂くというのは、京女が宗教教育に力を入れているということを、他の先生にも理解していただくという意味があります。

そういうかたちで仏教学の時間を経験していくうちに、最初の「どうして仏教をとらなきゃいけないのか」という思いが、「ああ、京女に来たから仏教が学べるんだ」「仏教ってこんな教えだったんだ」「こういう機会がなかったら聞く機会もなかったかもしれないけど、聞くことができてよかった」と思うようになる学生が非常に多くなってきます。

なぜそれが言えるかと言いますと、卒業の時に希望者が帰敬式を受けます。帰敬式というのは、お剃刀（かみそり）を受けて法名を頂くわけです。希望者だけなんですが、年々人数が増えてきているんです。さっき事務所に電話して確認したんですが、今年の卒業生で帰敬式を受けたのが三二二名、去年が四二〇名でした。大変なのはそれだけの学生が一斉に正座をして、御門主が剃刀を当てられるのを待っているわけです。四〇〇人が座っていて、御門主もその四〇〇人にずっとお剃刀されるわけですから、腕も疲れられると思いますけれど、それ以上に大変なのは学生たちです。正座の経験も少ない学生が、全員が終わるまでの時間、緊張して正座しているわけです。終わって「さあ、足を崩していいですよ」となると、「うわぁ～」という歓声が起こって、みんなバタバタっと、そういう状況です。それでもそれだけ多くの学生が帰敬式を受けたいと思ったのは、仏教に対して好意的な印象を持ったからだと思います。そのようなかたちで宗教教育が生き

ているわけです。

礼拝の時間以外に、宗教教育活動を行う「宗教教育センター」がございまして、そこが毎月、新聞を出しております。『芬陀利華（ふんだりけ）』という新聞なんですが、タダで学生に配ります。いろいろな先生が原稿を分担するわけですが、私も毎年一回は書かせて頂くようにしています。学生対象に書くのですが、仏教を専門にしている学生ではありませんので、できるだけ易しく、興味を持たせるように書くわけです。その中にはユーモアを入れてみたり、余談を入れてみたりします。身近な話題の話を読んでいくうちに、いつのまにか仏教に巻き込まれていくという、そういう文を狙っています。そういう文章を二十年にわたって書いてきましたが、二年前に布教講会と申しまして、本願寺で全国の布教師の研修会がございました。その研修会の副講師として話をさせていただいた時に、書いた文を紹介したら、本講師であった龍谷大学の桂先生に、本にするように薦められまして、だんだんとその気になりまして、とうとう去年に本を出しました。それがこの本、タイトルが『晴れた日には永遠が見える』です。表紙をご覧になって分かると思いますけれども、景色なんですね。ずっと見えるのが西山です。京都女子大学は女坂がありまして、東山をすこし登ります。高台にある校舎の五階に礼拝堂がありまして、そこから京都の町が一望できるんですね。西山が何にも遮られずに北から南までずっと見えます。学生たちが帰った後、西の空を見ていると夕陽がまた綺麗で、はるか彼方の西を思います。そして考えた文章が、最初に出てくる『晴れた日には永遠が見える』というタイトルの話です。

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

『手紙』

さて、京都女子大学で教えております仏教学は、学生に仏教の教えに親しんでもらいたいという点もありますが、必修ですから、それをとらないと卒業できません。にも関わらず、厳しいんですね。毎年、一割強が単位を落とします。大切なことを伝えたいという思いに答えて欲しいわけですが、最初からそっぽを向いて講義を聴かない学生は、試験をすると書けないわけです。そうすると、単位を落とすことになります。そういうことを文章にしたことがあります。今日はこの本に従って、少し読みながらお話をさせていただきたいと思います。

『手紙』という文章です。私が単位を落として、卒業できなかった学生のことですが、ちょっと読ませて頂きます。

『手紙』

手紙を書いた。

書かずにはおられなかった。書かなければ、私の心は揺れ動き、とても落ち着くことはなかったのだ。

その手紙は、一人の学生への手紙だった。その学生は、私の担当する仏教学の試験の結果、再試験を受けることになり、その再試験の結果も思わしくなく、私は悩んだ末に不合格

の点数を付けた。その学生は短大の二回生、卒業回生であった。必修の仏教学が不合格になることは、そのまま卒業延期を意味していた。にもかかわらず、私は迷った末に、不合格にすることを決心した。つらい決断であった。成績結果を提出した後も心は動揺し、後味が悪かった。彼女の人生を変えるかもしれない決断をすることは、とてもつらいことであった。どうして少しでも努力をしてくれなかったのだろうか、泣きたい気持ちだった。私は、手紙を書こうと決めた。私の決断の意味を、少しでも理解して欲しかったからだ。

○○さん

この手紙を読まれる頃には、再試験の結果もすでに聞かれている頃だと思います。

卒業が延期になった今回の結果を知られて、残念に思われ悲しまれていることと思います。しかし、今回の結果については、ご自身でもある程度は予想されておられたかもしれませんが、私としても充分に考えた末での判断ですので、そのことについて理解しておいていただきたいと思い、手紙を書くことにしました。

再試験の答案を受け取った時、最初は答案の内容に驚き、これではとても合格は無理だと判断をしました。しかし卒業回生でもあり、何とか卒業させてあげることはできないかと何度も読み返し、評価できる箇所を探しました。しかし残念ながら、それを見つけることはできませんでした。

今回の「仏教学Ⅰ」の再試験は、前期の試験での結果であり、充分な準備期間があったはずです。それにもかかわらず改善が見られない答案に対しては、評価のしようがないので

す。せっかく与えられた再試験というチャンスを、どうして自ら放棄するようなことになったのでしょうか。

あなたの人生にとって、大きな影響を与える判断を下すことになりました。あなたにとって、非常につらい結果となったことでしょう。しかし、そのような判断を下さなければならなかった私も、非常につらい思いをしているということをご理解ください。できるなら全員を合格にして、誰からも怨まれずにいたいと思います。しかし、どんな答案に対しても合格の判断を下すならば、必死の思いで再試験の準備をした他の学生の努力は、意味がなかったことになります。また、試験をして成績を評価したり、再試験をしたりといったすべてのことは、無意味な行為になります。

おそらく何度も単位を落とし卒業を延期させた仏教学は、あなたにとって見るのもいやな存在かもしれません。しかし、京都女子大学が建学の精神として、八十年以上にわたって大事にはぐくんできたこの仏教の教えこそ、京都女子大学を京都女子大学たらしめているものであり、社会の京都女子大学に対する評価は、その精神によって育てられた多くの卒業生たちに対する評価でもあるのです。

仏教学は、実際に講義で聴かれたように、特定の宗教を強制するものではなく、人間として生まれて社会のなかで生きていくための大切な考え方を伝えるものです。京都女子大学の卒業生として社会に送り出すために、そして卒業生として社会で立派に生きてゆくために、少なくともこれだけは知っておいてほしいという願いが、必修である仏教学の存在している

意味の一つなのです。

友人たちといっしょに卒業できないことは、あなたにとって大きな挫折かもしれません。しかし、あなたの人生はまだ始まったばかりなのです。人生にとって何が大切か、人間にとって大事なことは何なのか、そういうことを知らないまま、京都女子大学の卒業生として自信を持って社会に送り出すことはできないのです。自分の行動に対する責任をきちんととれ、社会のなかで自分の責任を自覚できる社会人となるには、あなたには少々早すぎるのだと考えてください。

しかし、あなたはまだ若いのです。この挫折を乗り越えた時、きっとあなたは人生において決して消えることのない宝を手に入れることができるはずです。そしてあなたが本当の意味で大人になった時に、この経験があなたの人生において持つ意味を理解できることだと思います。

今回の私の判断の意味を、今すぐに理解してくれるとは思いません。しかし、いつの日か人生を振り返ることがあった時に、今回の経験が人生において決して無駄ではなかったと思えるように、これからのあなたの生き方が、もっともっと重要になることを理解しておいてください。

京都の片隅より、あなたのこれからの人生を応援しています。

清基秀紀

成績発表のあった日に届くように手紙を送った。

私は彼女の顔も知らず、言葉を交わしたこともなかった。彼女がどんな反応をしたのか、想像さえできなかった。

返事はなかった。彼女がどんなに悲しみ、家族がどんな反応をしたのかは分からない。ただ、このことで学校を辞めることなく、半年遅れでも卒業してほしいとだけ願っていた。彼女が大学を辞めてしまえば私の願いは意味を失う。

本当の卒業

四月、すべてのものが新しく感じられる季節がやってきた。キャンパスは、一目で新入生だと分かる初々しい学生たちであふれていた。最初の講義を終えて出席カードを見ていた私は、彼女の名前をそこに発見した。彼女は大学に戻ってきた。そして、私の仏教学にもう一度チャレンジしようとしたのである。

私には彼女の姿はわからなかった。照れくさいのか、彼女は私の前には姿を見せず、出席カードの裏に手紙を書いてきた。

彼女は、きちんと返事を書かなかったことを詫びた。彼女は就職が決まっていた。最初はショックで、大学をやめることしか頭になかったという。しかし、家族や就職先の人と話をし、冷静になって考えてみると、やめるということは安易な逃げ道でしかないと、自分で思えるようになったと言う。彼女は決して逃げることなく、正面からこの壁を乗り越えることを、自分の意志で選んだ。

週一回の午後の講義の時間を、就職した彼女がどうやって作ったかは知らない。彼女は、家族や就職先の人たちに迷惑をかけた。しかしまた彼女は、心配したり励ましてくれたりする友人や家族など、様々な人たちの思いやりを、充分に感じたに違いない。

半年後、社会に出て少し大人になった彼女は、はにかみながら試験の答案を提出し、教室を出ていった。残された答案の裏には手紙があった。

今度は講義もきちんと聞き、勉強もしたから、答案は自分でも書けたと思う。でも今考えると、どうしてこんな簡単で当たり前のことが、一回生、二回生の時にできなかったのだろうかと思うと情けないと書いてあった。そして彼女は、社会人をしながら学生をするという、他の人にはめったにできない体験をした半年だったと書いていた。

彼女は、自分の行動の責任を自分でとり、一人の社会人として、あらためて社会に出ていった。学生と社会人を同時に経験したこの半年で、彼女は社会に出ることの意味、学生を卒業することの意味を学んだに違いない。そして、彼女は今度こそ本当に仏教学を学んだのだ。

おめでとう。卒業おめでとう。君は本当に卒業をした。とうとう京都女子大学の卒業生になったのだ。

もう二度と会うことのない彼女へ、私は最後の手紙を心の中で書いた。

仏教が、決して知識だけでなく人間の成長を願っているということがお分かりいただけたでしょうか。実はこの文章は講義の最初に読むんです。学生はこれを聞くと「あ、落ちることもあるんだ」ということと、先生はそういう気持ちで教えてくれるんだということを分かってくれるんですね。静かになります。みんな聞くようになります。一五〇人の学生ですから、一人一人がちょっとしゃべるだけでもザワザワします。気をそらされるのはいやですから、注意を惹きつけたい。だから飽きさせないようにどんどん話を継いでテンポよく話をしようと心掛けています。それでいつのまにか早口になってしまいました。ゆっくり話そうと心がけてはいるのですが、つい早口になります。お許しください。

実は、阿弥陀仏の本願は、みんなを救うという、温かい慈悲の心です。阿弥陀仏の本願を伝えるのなら、学生みんなを合格にして、みんなを救ったほうが良かったでしょうか。そういう考え方もあるかもしれません。でも私はそれでは大事なことを学ぶ機会を失ってしまうと思うのです。この学生は確かにつらい目にあった。でも彼女はそのことを乗り越えて、人生において非常に大事なことに気づいたのではないかと思うわけです。そして、彼女の経験を聞くことによって、他の学生もおそらく仏教学を学ぶことの意味をわかってくれたのではないかと思うわけです。仏教は、私たちがいかに生きるかということを考える教えであるはずです。それを伝えることが大事だと思うわけです。

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

現代に伝える仏教

――宗教的環境

今日のサブタイトルにあげさせて頂いた「現代に伝える仏教」ということです。現代ということを敢えてあげさせて頂きましたのは、ずいぶん時代が変わってきたという気がするからです。今までは、家庭にお仏壇があって、おじいさん、おばあさんが手を合わせている姿を見て、子供は育ちました。おじいさん、おばあさんと一緒に、意味も分からずに手を合わせていた、そういう習慣が例えば大人になった時に、「あ、こういうことだったのか」と分かります。その、心の原風景と申しますか、小さい時の思い出は、決して理屈ではありません。仏教の教えが分かったというわけではないけれども、そのような宗教的環境が家庭にはあったと思うわけです。

ところが現代では、そのような環境のなかで育たない若い子たちが非常に多いわけです。家庭にお仏壇がないのです。おじいさん、おばあさんの所にはあるけれども若い家庭にはない。そうすると、手を合わす対象もなければ、おじいさん、おばあさんが手を合わせている後ろ姿を見ることもない。そういう環境で育つ子どもたちがどうなるんだろうかと、やはり私たちは心配せざるを得ないわけです。若い人たちにそういう宗教的な環境がないということと同時に、道徳がどんどん失われていく世の中になり、〝しつけ〟ということもされなくなってきています。若い子

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

たちのそういう姿を見て、この子たちが大人になれば世の中はどうなるのだろうかという不安。十年前、二十年前もその危惧はありました。それがどうなったかといいますと、信じられないような少年犯罪のニュースです。目を覆うような犯罪とか事件とかのニュースばかり放送されますから、ニュースを見るのもいやになります。

ところが少年犯罪の件数からいくと、実は増えてはいないんです。数は増えていない。でも私たちが不気味に感じるのは、普通の子が罪を犯すことなんです。「どうしてあの子が」「なぜ」という事件があまりにも多くなってきた。そのようにお感じにならないでしょうか。

――死生観

人の命ということ、生きるということ、生死ということ、それを一体若い子たちがどんなふうに感じているんだろうかということが、心配でならないと思うんです。死生観というものが形成されていない。いろいろと指摘されていますが、たとえば家庭で死というものを見ることが少なくなりました。昔は、家でおじいさんなりおばあさんなりが息を引き取り、その悲しみを経験した。そして命はどうなっているのか、おじいさん、おばあさんは一体どこに行くのか、幼いながらもそういう事を考える機会はあったと思うんですね。ところが今はほとんどが病院で亡くなります。病院での亡くなり方は機械の反応を見て判断するわけで、死の実感というものがなかなか感じられない。また、その現場に子供たちが立ち会わないことも多いですね。いよいよおじいさんかおばあさんが危ないという時に、親は駆けつけますが、子供たちは「明日、学校あるからい

いよ」とか「試験が近いからいいわ」というように、子どもたちは病院に行かない。確かにお葬式の場面で、お棺の中で花に埋もれているおじいさん、おばあさんの姿を見るかもしれないけれども、「今、亡くなった。悲しい…」という場面は経験しない。そのように、死の現場を経験することが、どんどん失われてきていると思います。死の実感がないと、死は悲しいものだとか、失われた命が二度ともどらないとかの実感がないわけです。

長崎で小学校六年生の子が同級生を殺害するという事件がありましたね。それも普通の子だったんです。ジャーナリストが地元まで行っていろいろ調べたけれども、どう調べても普通の子なんですね。何故なのか理由が分からない。そのような事件があると、必ず次の日の全校集会で校長先生が「命は大切に」という型通りの話をされます。しかし、「命を大切に」という言葉は何度も聞いています。どう大切にするのか、命はどういうことなのかという、もっと大事なことを聞く機会がないわけです。一つには、公立の学校では宗教を教えられないということがあります。「命は大切」からもう一歩踏む込むためには、宗教的なものに触れざるを得ない。ところが公立の学校では宗教というのは触れてはならないというわけです。ですから「命は大切に」という型通りの言葉で済ますことになるわけです。長崎の学校で、これではいけないと、クラスで命について話し合うという場面がありました。

ＮＨＫで放送されましたが、その時に衝撃的だったのは、三十三人のクラスの中で、「死んでもまた生まれ変われると思う人は手を挙げてください」と手を挙げさせた時に、三十三人のうち、実は二十八人が「また生まれ変わる」と手を挙げたんですね。漫画でもアニメでも、ドラマ

でもそうなんですね。死んだ人が霊になって人に乗り移ったりとか、誰々の生まれ変わりとか、そのような設定の話がいっぱいありますね。フィクションだからそういう話になります。現実そのままではドラマにならないから、そういう話になるわけです。ところが、そういうことを毎日毎日見ていると、それが現実なのか虚構なのか、おそらくかなり分かりにくくなってくるんじゃないでしょうか。ゲームでは、主人公が死んでもリセットしたらまた生まれ変わります。そのように命というものの本当の大切さを学ぶ機会が、この頃の若い子たちには非常に少なくなってきていると思います。子供たちに悲しい思いをさせたくないという配慮なのかもしれませんが、現実の「死」を経験した時に、ただ悲しいだけではなく、おじいさんはどこに行ったんだろうかとか、我々が死ぬということはどういうことなのかとか、考えるわけです。自分たちの命もやがては終わるということを、やはりきちんと認識しておかないと、なかなか死生観というものに繋がらないという気がするわけです。

実は、家庭ではそういう話はなかなか難しいんですね。先ほどのＮＨＫで放送された長崎の小学校では、「死んだらまた生まれ変われる」ではいけないというので、家庭で「死」ということを話し合ってくださいと、それぞれの家庭に持ち帰って考える課題を与えました。ある家庭にテレビカメラが入るんですが、いきなり、死とはどういうことなのか、お母さんに聞くわけです。家庭ではそういうことを話したことがないから戸惑うわけです。「死」とかそういうものは避けたい、子どもにはそのような情報はできるだけ与えないでおこうとします。そのように、きれいなものしか見せないような教育が今まで家庭ではされていたのじゃないかと思うわけです。

そういう家庭に育った子どもには、当然ながら、死生観が形成されないと思います。そのように、宗教的な情報から隔離された子供たちは、どこで情報を得るのかというと、それが実はテレビとかインターネットなどの情報なんですね。最近は、親から聞く話であるとか、自分が実際に体験したことよりも、テレビで見たという体験や、インターネットで調べたということの方が情報量としては圧倒的に多いんですね。何故かというと、テレビやインターネットのほうが、分かりやすく、はっきりと言ってくれるわけです。そういう情報が巷には溢れています。子どもたちはそういう情報を身に付けて、どんどん成長していくわけです。今では、情報というのは調べようと思ったら簡単にいくらでも出てきます。本を読むまでもなく情報は出てきます。だから本を読まないんです。本というのはじっくり読むための大切なものであるはずなのに、本を読まずに断片的な情報ばっかりを集めるようになっていきますね。そうなると、情報の量は増えるけれども、一つ一つの情報というのが薄っぺらなものになってきています。情報が軽くなってきているわけです。

先ほどから、「死」というのが最近は隠されて見えなくなったと話していますが、実は今年になってから、大きな変化がありました。『おくりびと』です。あれは正面から「死」をテーマにしたわけです。あの映画は、映画そのもので話題になったというよりも、アカデミー賞を獲ったことで大きな話題になりましたですね。それと芥川賞の『悼む人』という本です。それもまた非常に変わった設定なんです。新聞などに、事件があってどなたかが亡くなった記事が出ます。するとその現場に出かけていって、その人が一体どんな人だったのか、どういう存在だったのかと

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

考えて、その人の死を悼むわけです。見ず知らずの人ですよ。関係者にその人がどんな人だったのかを聞いて、その人の死を「悼む」、そういう人が主人公です。その小説が芥川賞になったわけです。今まではそういうテーマは一種のタブーと申しましますか、正面から扱わなかったと思うのです。

そのように「死」を避けるのではなく、正面から扱う。それが今年だけで終わるのか、変化になるのか、来年以降を見てみないと分かりませんが、断片的なインターネットやテレビの知識だけなく、掘り下げて考えることの大切さが見られます。

考　え　る

テレビというのは非常に問題がありまして、映像というのはものすごく説得力があるわけです。私たちは耳でいくら聞いても映像で見ない限りはなかなか信じられない。例えば、昨日ですか今日ですか、日本で初めて新型インフルエンザが見つかった。話で聞くだけでは実感はないけれど、そこに防護服を着て何かしている姿を映像で見ると、「あぁ、やっぱり何か起こったんだな」という実感として感じられる。我々は映像で見せられないと、話だけでは信じないという時代になってきました。ところがその映像というのが実はくせ者で、テレビというのは非常に恣意的な編集をします。必ずしも真実をそのまま映像にできるわけではありません。例えば何か事件があると、ワイドショーなどで再現ドラマにします。細部まで分かるはずがないのに、ドラマに

するためには細部まで再現しようとします。例えば事件があった部屋はそんな部屋とは違うかもしれないのに、事件の部屋を作ってしまいます。我々は、その事件があった現場を、そして事件そのものを見たような気分になるわけです。

私たちは自分が体験したことを理解しようと、考えて悩んでいろんなことを学んでいく。こうかもしれないし、ああかもしれない。悩んだ時間、考えた時間というのが必ずあるはずです。ところがテレビとかインターネットは、こうですよと結果をまず提示します。こうかもしれない、ああかもしれないという曖昧さはなく、ものすごく単純化された情報として、私たちの手に届く時代になってきたわけです。伝えられたそのままを受け取ってください、あなたたちは考えなくてもいいんですよというのがテレビの伝える情報ですね。だから、テレビを見ているときに我々はそれほど考えないですね。一つの事件があってそのニュースを見た時に、それについて深く考える間もなく次のニュースが出てくる。そして「そうなんだ」というかたちで、テレビの「こうです、こうです」という情報を我々は蓄積するだけで、物事を深く考えるということがほとんどなくなってきた。映像で見せられると考える必要はないんですね。

文字ならば、例えば本ならば、その場面は実際にはどうなんだろうと、想像することができますね。想像せずに全部細部にわたって映像で示されるのがテレビです。それに慣れてくると考えるのがめんどうくさくなるんですね。だから「要するにどうなのか」という結論だけを言って欲しいという傾向になる。それがこの頃は問題になってきています。日本の社会がどうなるのかということにも影響が出てきます。

日本の社会はどうなるかということは、多くの場合政治が決めていくわけですね。その政治の今の混乱は何のせいか分かりますか？　例えばある時には「あなたは郵政民営化、賛成ですか、反対ですか」と、それだけですね。もっといろいろ複雑な要素や問題があるにも関わらず、単純に「イエスかノーか」というように提示されて選挙が行われる。それで自民党が増える。ところがその次の選挙では年金問題が中心になって、「年金問題で腹立ちますか、立ちませんか」と言われたら、「あぁ、やっぱり腹立つ」と。それで今度は民主党が増える。本当は政治というのは、複雑な問題がいろいろあるにも関わらず、テレビが非常に単純化して、マークシートの問題のように提示される。そのようなかたちで選ばれた人たちが政治を動かし、日本の将来を決めていくという混迷になっているのが現状ではないんでしょうか。そのように、〝考える〟ということが非常に少なくなっています。

大学の最初の講義で学生に言うんですね。今まで皆さんがしてきたのは〝勉強〟なんだと。勉強というのは、勉めるよう強いるんだと。むりやりがんばらされていたわけで、考えなくても言われたようにやればいいわけです。「なぜ」と考えなくても、試験に出ることだけを覚えなさい、興味があるかないかは関係なく、広く浅く、試験に出ることを勉強してきたのが、大学受験のための勉強でした。

でもあなたたちはそこから解放されて、大学に来たらお勉強じゃないでしょ、大学では〝学問〟をするんでしょ。学ぶだけじゃなしに、そこにあるのは〝問い〟でしょ。聞いたことに対して問いを持つんです。何だろうか、それどうだろうかと。問いはみんな違うわけです。私はこう

いう問いを持った。これは試験に出る出ないは関係ないですね。私はこのことについてこういう疑問を持ち、こういう興味を持った。疑問を持ったからこそ、このことを深く学んでみたいと思う。それが大学の〝学問〟というものです。

人間は、大学の学問と同じように、大きくなるに従ってものを考えるということを身に付けていくんです。考えてみると、人間だけなんですよ。動物は考えることはできないです。例えば、動物に「明日、どうする？」なんて話できますか。明日なんてわからないですね。サーカスの動物は芸をする。「全部終わったら後でごちそうあげる」と言っても信用しないですね。考えられないから。だから一つ芸をするたびにポケットからエサをあげるんです。条件反射みたいなもんですね。それは、動物はものを考えないからです。動物は、私たちはどこから来てどこに行くんだろうということは考えないです。以前にヨーロッパへ行った時、スイスで牛が草を食（は）んでいる様子をじっと見ていたことがありました。この牛は一体何を考えているのかと考えましたが、おそらく何も考えてないですね。動物は食べるために生きているでしょ。食べるために生きているのだったら、エサを探すことが生きるために非常に重要な要素ですね。ところが牛は、足下全部が食べ物なんです。探さなくていいわけです。それを一日食べているんだから、一体何を考えているんだろうと考えながら見ていたことがありました。牛の気持ちはわかりませんが。

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

『声が聞こえる』

そういうかたちで、物事を深く〝考える〟ということがなくなってきたと思うんですね。やはり〝問う〟という時間を与えられることが、我々にとっては非常に大事なことなんですね。宗教ということはそういうことですね。我々は一体どこから来て、どこに行くんだろうか。死んだらどうなるのか、そういう問いがあるからこそ、宗教というのは生まれてくるわけです。答えは出ないんです。死んで生き返った人なんて一人もいないわけです。よく臨死体験とか言いますけれども、臨死体験というのは、死にかけただけであって、本当に死んで生き返った人は一人もいないんです。死にかけたというのは「生」のうちにあるわけですから、死ぬ間際の夢かもしれないんですね。笑い話があるんですけれども、死にかけて臨死体験をしたかもしれないという人に「あの世はどんな世界でしたか」と言うと、「うーん、とてもこの世のものとは思えなかった」という話です。確かにあの世はこの世とは違うわけですが。

宗教、仏教というものが〝考える〟ということを出発点にしているということは、生きるとか、命とかについて考えるということを大事にしていることになります。同じ経験をしても、考えるか考えないかで随分違いがあると思います。学生たちに、ある経験をしても、考えるとこういうものが見えてくるんだよという話をすることがあります。また一つ読んでみましょう。この本の最後に出てくる『声が聞こえる』という話です。赤ちゃんが亡くなった時の話です。

「声が聞こえる」

悲しくないお葬式はない。しかし、数年前に経験したお葬式は、ことさら涙を誘うものだった。そのお葬式は、わずか二ヶ月半で亡くなった赤ちゃんのお葬式だった。

改築のため取り壊される葬儀会館の、その一番最後として行われたお葬式は、工事の準備にあわただしいなか、そこだけ時間が止まったように静寂が支配していた。そのなかで、小さな棺（ひつぎ）に納められた赤ちゃんの顔を、しゃがんでじっと見つめるお母さんの後ろ姿は、今でも私の脳裏に焼き付いている。黒い喪服の陰に見えた、手に握りしめられたハンカチの白さが悲しかった。

その赤ちゃんは、生まれた時から身体の異常があり、半年の命もないことが、お医者さまから宣告されていた。しかし、大切な命として胎内に宿した月日、そして命が消えるそのときまで共に過ごした時間が、お母さんに対しては、なかなか覚悟を与えてはくれなかった。憔悴（しょうすい）しきった後ろ姿に、かける言葉はなかなか見つからなかった。

家族として一度も一緒に暮らすことなく病院で亡くなった赤ちゃん。だからこそ、せめてきちんとお葬式をして送り出したい、そんな家族の気持ちのこもった、心うたれるお葬式だった。

お葬式は身近な親戚だけに知らされ、かけつけた誰もが、子どもを失ったつらさを自分の悲しみと感じているようだった。

内輪だけのお葬式に、弔電や弔辞のような儀式めいたものはなく、赤ちゃんを送る言葉と

して、お母さんが書いた手紙が読まれた。とても自分で読めそうになかったお母さんに代わり、お父さんによってその手紙は読まれた。二ヶ月半の間に書かれた三通の手紙。死にゆくわが子を見つめながら書かれた手紙は涙を誘った。そのなかで、お母さんはこんな言葉を赤ちゃんに贈ったのだった。

赤ちゃんへの手紙

あなたは私たちの子どもとして生まれてきました。しかし、毎日泣くばかりで微笑み一つ返してくれることはありませんでした。あなたは私たちに、悲しみと苦しみしか与えてくれなかったかのようです。

しかし、命が長くないことも知らないあなたは、手足をバタバタさせて、毎日懸命に生きようとしていました。私はその姿に、やがて感動を覚えるようになったのです。私は何十年と生きてきて、はたしてあれほど懸命に生きようとしたことがあっただろうか、与えられたこの命を本当に大事に生きてきただろうかと、あなたの姿に反省させられたのです。

あなたは私たちに喜びは与えてくれなかったかもしれません。しかし、私はあなたから、もっと大切なことを教えてもらったのです。あなたが私たちの子として生まれたことを感謝します。〇〇ちゃん、生まれてきてくれて、本当にありがとう。

火葬が終わり、小さな小さなお骨をひろい、火葬場からの帰途につこうとした時、硬い表

情のままだったお母さんが穏やかな表情になり、「ありがとうございました。ようやく心が落ち着きました」と、静かな口調で礼を述べた。

お葬式は儀式にすぎないかも知れない。しかし、誰もが悲しみを共有し、とても大切なことを学んだ一日は、私にとっても忘れられない大切な時間だった。

仏の声を聞く

私たちは人の死に出会った時、何を感じ、何を学ぶのだろうか。言葉を話すことのできない赤ちゃんは、私たちに教えを説くことはない。しかしその死から、命ということ、生きるということをお母さんは学んだ。限られた短い命を精一杯生きる姿を見て、私たちもまた本当は、限られた命を生きているのだということに気づくこともあるだろう。大切なことを教えてくれた赤ちゃんを、私たちを導くためにこの世に生まれてきてくれた還相（げんそう）の菩薩であると感じる人もいることだろう。同じ経験をしても、人によって学ぶことは異なる。何を学ぶかは、私たちの問題なのだ。

私たちが阿弥陀仏に手を合わせても、阿弥陀仏は何も語られない。しかし、浄土からのよび声は私たちに届いている。それを聞くのは、その声を心で受けとめるのは、私たちなのである。

阿弥陀仏は、すべての人を浄土へ救いたいという大きな慈悲の心で、つねに私たちによびかけている。その願いは、この私のためであったのだと受けとめられたのが親鸞聖人であ

る。すべての人を救いたいという本願は、実は私たち一人ひとりのための阿弥陀仏の願いなのである。

阿弥陀仏のよび声は、この私をよぶ声であった。はからいを離れた素直な心にこそ、その声はきっと聞こえてくるのである。

私たちが何を学ぶかは私たちの責任なんですね。同じことを経験しても人によって学ぶことは違うんです。そのことが一番大事なことではないかと思うんですね。だから同じ経験をしても何も学ばない人もいるかもしれない。例えば赤ちゃんを亡くしたお母さん、突然わが子を亡くしたら、悲しいだけでおそらく何も考えられないかもしれない。でも残酷なようだけれども、このお母さんは死にゆくわが子を二ヶ月半見続けたんですね。赤ちゃんがちょっと動くだけで〝死〟の陰を見るんです。死をずうっと見続けたら何が見えてきたかというと、生きるということはどういうことなのか、死ぬということはどういうことなのか。そういうことが見えてきたんですね。自分なりにそういうことを考えるようになったんです。突然の悲しみならばそこまで考えは及ばないかもしれないけれども、考える時間を持つことによって、いろんなことが見えてきたんですね。とても大事なことだと思います。

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

考えないことの問題

――思い込みの危険

私たちがものを考えないということの問題点は、今流行りの占いにも見られます。占いというのは結局、物を考えないんですね。占いで「あなたはこうですよ」と提示されたそれを鵜呑みにするだけで、何故というのは決して考えることはないのです。例えば姓名判断というのがありますね。どこかの先生に見てもらって、何画が良いからというかたちで名前を付けてもらったりします。何画は良いですよ、何画のこの芸能人はこんなに幸せにしていますよと、本にはいろいろ幸せな例は書いてあるけども、何画が「何故」良いのか理由を書いてある本が一冊もないんですね。何故良いか誰かご存じですか。昔から言うとか、中国何千年の歴史とか言いますね。ところがはっきりしておきたいのは、中国に姓名判断はないんです。これは昭和に日本人の黒崎という人が考え出したものなんですね。じゃ、考え出した時に何を根拠に考えたか。例えばどんな占いでも、昔から言うというかもしれないけれども、どんな昔にも始まりがあるはずですね。じゃ、その始まりの人は一体どうやってその論を導いたのかというと、それを書いてあるものは全くないわけです。私たちはそのように根拠をもたないものに影響を受けるわけです。でも、影響を受けるんだったら、それは何故なのか理由を考える必要があります。考えれば、その矛盾はすぐに

わかります。面白いのは古本屋さんに行きますと、そういう姓名判断の古本が出ているんですね。私、立ち読みするのが好きなんですけれども、何が書いてあるかというと、「ほら、何画の人はこんなに幸せになりました」という例として、「松田聖子は神田正輝と幸せな結婚をしているのがその証拠」と書いてあるんです。その後どうなりました？　その例一つみても分かりますね。それから風水とかありますね。風水に従って、ものすごく幸せな結婚をしたはずの、あの人ですね、この前離婚しましたですね。そういうことです。我々は物事をきちんと考えたら、おかしいということはすぐに分かるはずなのに、情報化社会で、情報がどんどん積み重ねられていき考える時間もない。そして信じ込まされていくわけです。

姓名判断はいいけども、これなら科学的だとして今大流行なのは何ですか。ベストセラーにも出てくるのは血液型ですね。血液型によって性格が分かると信じておられる方が多いかもしれませんけれども、誰が始めたか、ルーツも分かっているんです。第一次世界大戦がそもそもの始まりなんです。第一次世界大戦では日本が勝って、ドイツが負けたんですね。時のドイツ皇帝が大変ご立腹された。我々は、日本は世界地図の真ん中で真っ赤に燦然と輝くと思っていますけれども、日本以外の世界地図では大西洋が真ん中で、アジアの果て、右端のところで細くなっているのが日本なんです。そんなちっぽけな国に負けたということをプライドが許さなかったんですね。科学者に、何とか科学的にドイツ民族が優秀だという証拠を調べなさいというので、当時のドイツの科学者のヒルシュフェルトが注目したのが血液型なんですね。調べてみると、アジア人はB型が多い。ヨーロッパ人はA型が多いんですね。動物を調べてみると、動物の中で一番進化

したチンパンジーはA型なんですね。なるほど、人間の中の進化したのがA型の多いヨーロッパ人で、B型の多いアジア人は進化が遅れているということになったそうです。時のドイツ皇帝はとても喜ばれたそうです。

そして、そこで留学していた日本人が帰ってきて、ひょっとしたら血液型は気質と関係があるかもしれないとどこかに書いていたんです。それを見て興味を持ったのが、古川竹二という教育学者です。あるとき、親戚の子供十一人が集まっていたときに、積極的な子と消極的な子がいることに気づいた。血液型を調べるとある種の傾向があるように思えた。

その思いこみが実は不幸の始まりだったんです。十一人のサンプルだけで、そうだと思い込んだわけですが、その程度のサンプル数では偏りがあって当然なんです。何万とサンプルを調べても、なお偏りがあれば意味があるとするのが統計です。最初の十一人でそう思い込んで調べたものだから、客観的になれない。他のサンプルを調べていくうちに、仮説とあわない例がいくつも出てくるわけです。その時に古川竹二はどう考えたかというと、「あ、この子は自分の性格をよく分かってないな」と、そのサンプルを抜いたんですね。それを実は昭和二年の教育学会に発表したんです。最初は話題になりました。ところが科学的統計だから誰がやっても同じ答えが出るはずです。他の先生方も追跡調査をやったら、サンプル数が増えるにしたがって、特定の傾向がなくなってきたんです。それで古川説は否定されたんですね。否定されて面白くないから古川竹二は婦人雑誌に投稿し、その雑誌を戦後になってから見つけて、それをそのまま利用したのが、戦後の血液型人間学というブームなんです。

ところが考えてみたら、ドイツ民族こそ優れているという民族至上主義は、第一次世界大戦から次の第二次世界大戦へと引き継がれ、それがユダヤ人の大虐殺につながったわけです。血液型占いは民族差別から生まれたわけです。

だから、お遊びとして血液型を話題にするのかもしれないけれども、会社によっては、営業は何型に限るとか言って就職差別としても使われます。思い込みによって我々はそういうことを行います。何故なのかということを考えない。科学だ、統計だと思い込むから、そういう不幸が生まれてくるわけですね。

実際に第二次世界大戦の時に、伏見の連隊がO型は非常に好戦的だという説を信じて、O型部隊というのを作ったんですね。全員O型です。好戦的だからと、前線に送られて、全員戦死しました。悲劇ですね。たまたまその血液型に生まれただけで、戦争が好きだと思われたわけです。血液型の本には何型の性格の例として、それらしいタレントの例が出ていますね。でも、プロ野球の監督の中で一番明るい性格の長島と、それと正反対の性格だと自他共に認める野村が、実は同じB型だという事実一例だけでも、血液型と性格は無関係だとわかるはずなんですがね。

――テレビの影響

もちろん占い師は昔にもいました。でもそれは盛り場の隅のような場所にいて、個人的に占いをしているような人たちが多かったわけですが、今はマスメディア、テレビに出てきます。社会に与える影響がものすごく大きくなってきたと思いますね。最近の若い子たちが興味を持つの

は、スピリチュアルというものです。霊の言葉を語るわけですが、あれも実は裏があるわけなんです。あのような番組は、オウム真理教が問題を起こした時に、社会に与える影響が大きいのでテレビで自粛されていたんです。それで、もうほとぼりも冷めただろうと、またテレビ番組で復活するようになったんです。着物を着た太った人がですね、霊の言葉が聞こえるという番組です。最初は深夜番組だったのですが、人気があるからとゴールデンタイムに移動しようとした時、放送倫理委員会で問題になったんです。

霊の言葉が本当に聞こえるかのような番組を放送してもいいのか、ということです。それで、そのテレビ局の社長が出てきて、公式に倫理委員会で弁明したのは、視聴者が本気で信じ込まないように配慮して放送しますということだったんです。信じないように配慮しますということは、嘘だと認めているわけです。トリックなんですね。ヤラセなんです。あの手の番組はバラエティだから、まさか本気で信じる人はいないだろうというスタンスでテレビは放送しているんです。だからテレビを信じている人はすっかりテレビに毒されているわけです。こういう話はいろいろあって、話し出したらキリがありません。

ところが、実は私自身が奇妙な体験をしたことがあります。桂にあるマンションなんですが、おじいさんが突然亡くなったので、若い夫婦がお仏壇をお守りすることになったわけです。マンションで狭いからタンスのすぐ横にお仏壇が置いてあったわけです。タンスと言っても低いタンスなんです。毎月の月命日にお参りに行って、お仏壇の前で阿弥陀経をあげていたら、突然お仏壇がビリビリ…ってふるえ出すんです。ビックリしますよ。一体何が起こったか分かりません。

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

阿弥陀さんが「お前のお経は下手や」って怒ってられるのか、とは思いませんが、とにかくわけがわかりません。そうすると、ビリビリ…という音が突然ピタッと止まり、いきなりシュッという音がして目の前に白いものが落ちてきたんです。さすがにそれにはビックリしまして、正座しながらもおそらく五ミリくらいは飛び上がったと思うんですね。心臓がドキドキしながらも、最後までお経は続けました。終わって後ろ向いたら、若い夫婦が気の毒そうな顔をして「すいません！」って二人揃って頭を下げるんです。何だろうと思って落ちている白いものを見たら・・・何だと思います？　ファックス用紙なんですね。タンスの上にはファックスが置いてあって、正座しているから見えなかったんです。それがいきなり受信して、そのビリビリという音が、隣の仏壇から聞こえているように思ったんです。しかも自動的に紙がカットされて、その紙がちょうど目の前に落ちてきたわけです。これはビックリしました。まあ、その程度で動揺するとは修行が足りないと皆さんお思いかもしれませんけれども、私としても仏さんにお参りしている時に、まさかカミが降りてくるとは思いませんでした。

自分を見つめる

今のスピリチュアルなどのブームで、ほとんどのテーマになっているのは、開運とか、いかに私が幸せになるかということです。そして、今の私を肯定してくれるんですね。決してあまり嫌なことは言わないんです。嫌なことを言って、地獄に堕ちる、とか言っていた人はもうあんまり

出なくなりましたけど。私たちは今の自分を肯定して欲しいんです。

例えば、あなたが友達と上手くいかないのは、あなたが誤解されているんだと、きっとそのうちに友達も分かってくれるんだと慰められたり、あなたの先祖の霊がちゃんと見守っていてくれると言われると、少しホッとしますよね。確かに癒しにはなるかもしれない。でも、その癒しには何が欠けているかと言えば、自分を見つめるということが欠けているんですね。例えば、友達と上手くいかないという場合に、自分には何の責任もなくて、全部周りの責任なんでしょうか。占いなどもそうですね。私が変わるのではなくて、他に原因がある。あなたはこういう血液型だからとか、あなたはこういう星座だからとか、全部他に原因があると説明されます。自分は変わらなくていいから楽ですね。

でも、本当にそうなんだろうかと考えた時、例えば、人間関係が上手くいかない時に、本当に私に原因がないんだろうかと考えると、自分にも原因があったことに気づきます。自分が変われば人間関係が変わる可能性が高いですね。そのように自分を見つめる目が本当に大事なのに、他に原因を探すわけです。例えば、自分が人生で選択に迷ったときに占いで見てもらう。その占いの通りにして上手くいかないと、占いのせいになります。自分で選んだ道なら、たとえ思い通りにならなくても、責任を持って最後までその道を行く気持ちになれるんですね。他のせいにしないからです。それは、自分を見つめる目があるからなんです。だから私たちは、ものを考えないということで、自分自身を見つめるということを失っているわけなんです。

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

〝幸せ〟とは

仏さんはあまり目をパッチリ開けておられませんね。ご存じのように半分目を閉じておられるのは、外を見ると同時に自分自身も見つめておられるからだと説明されることがあります。自分自身を見つめるということがなければ、他に対する思いやりなり、そういうことを考える機会も失われるということになると思うんですね。何故かというと、自分は変わらずに責任は他に全部転嫁するからなんです。例えば開運であるとか、あなたが幸せになるという占いとかあります。我々は「幸せになりたい」と考えるわけですけれども、そこでもう一度考える必要があるわけです。じゃあ、その〝幸せ〟とは一体何なのか。

講義のとき学生に「あなたの幸せは何ですか」と聞くんですね。そうすると「とりあえずお金があったら幸せ」だと言います。「いくらくらい欲しい？」と言うと、ちょっと前までは百万円くらいだったのが、この頃はいきなり「一億円」です。何に使うのか知りませんが、お金の値打ちも落ちたようです。それで、「あなたに今、百万円を私があげるとします。あなたそれで幸せですね？」と確認したら、あげたわけじゃないのに、ニコニコ笑って「幸せです」と言うわけです。「じゃ、あなたには百万円あげるけれど、あなた以外のみんなに私は二百万円あげます。幸せでしょ？」と言うと顔色が変わるわけです。分かりますか。百万円あったら幸せだと言ったにも関わらず、私以外の人が二百万円をもらったら私は幸せじゃないわけです。百万円〝しか〟も

らえないわけです。「じゃ、あなたの幸せって一体何なのでしょうか」と聞きます。要するに他の人が百万円で私だけが二百万円もらったら幸せを感じるわけです。ということは我々の幸せというのは、他人よりどれだけ持っているかということにすぎないわけです。これは〝欲〟なんです。

我々は欲を満たすために生きています。しかし、欲を満たすことをそのまま肯定することが宗教なのだろうかと考えたら、やはりどこかおかしい。欲を追究するところではないところに、本当の揺らぎのない幸せがあるはずだと気付くことが、宗教の一番大事な点ではないかと思うわけなんです。

確かに世俗的な生き方をしていると、ものが手に入ったら嬉しいわけです。しかし、嬉しいけれどもその喜びがいつまで続くのかというと、手に入ったらすぐにまた次のものが欲しくなるんですね。百万円が手に入ったら、さらに百万円欲しくなります。それが手に入れば、五百万円と、欲はどんどん深くなるわけです。でも待てよと。お金が儲かることだけが幸せなのかといえば、そうじゃないだろうと。考え方一つで我々の幸せは違うかたちになる。仏教はそういうことを教えるんです。決してものが手に入ることが幸せじゃなくて、私たちが考え方なり、見方を変えることによって、揺らぎのない幸せというのを得ることができると、そういうことを教えているのが仏教だと思うんですね。

この世の中で、「何も言うことはない」というような幸福な人は少ないかもしれません。必ずどこかに問題をかかえている。その問題を考えた時に、例えば病気になった時、確かに理由はあ

ります。病気の原因がウイルスであったり、分析していけば理由はわかるんでしょうが、何か他に理由を求めたくなる。なぜ、他の人ではなく私がそうならなければならないのか。そういった不幸に霊感商法がつけ込んだりするわけです。

とにかく断定して欲しいわけです。体のどこかが悪くなる。病院に行っても「原因は分かりませんね」と言われるのか、「原因はこれです」と言われるのか、どっちがホッとするかと言えば、少なくとも、原因が分からないという状態よりも、はっきりと病気の名前を言ってもらうほうがホッとする。原因が分かれば対処の方法も分かるからです。

何か分からないという状態は、我々にとっては非常に不安があります。家族のなかで一ヶ月の間に二人も病気になったとします。それは、たまたまであって、偶然にすぎなくても、何かそこに意味があると考えます。なぜなのか理由が知りたいわけです。何でもいいから理由を言って欲しいのが人間なんです。だからそこに「あなたの三代前の先祖の祟りだ」と言ってもらえると、それが嘘であるか本当であるかではなく、理由を言ってもらえたらホッとするわけです。そうすると一生懸命に墓参りに行ったりするわけです。墓参りに行って病気が良くならなくても、回数足りないのかと考えたり、お供え物を増やすとか、そういうかたちで対処を考えようとします。それは我々にとっては、未知の不安が、ある種の説明によって和らぐ、そういう効果があるんだと思います。

『晴れた日には永遠が見える』

現在、依然として若い子たちを中心にスピリチュアルとか精神世界に関心をもつ人が増えてきています。実はスピリチュアルという言葉は非常に曖昧で、英語で言うと「スピリチュアリティ」か「スピリチュアリズム」かのどちらかなんです「スピリチュアリティ」は精神性なので、例えば、お医者さんがケアするのに、病院で精神的なものも大事にしなくてはという時に使われるものです。テレビで出てくるおどろおどろしいものは「スピリチュアリズム」というもので、生きている人間を通して霊が言葉を語るというものです。これはアメリカで始まったんです。フォックス姉妹という人が家の中で質問をすると、家に憑いている霊が返事するんです。ポンポンと音がする。ＹＥＳなら一回、ＮＯなら二回とか音がするわけです。フォックス姉妹は霊と語れると評判になって、人が注目するわけです。それが話題になってから、あちこちで降霊術がはやり出しました。真っ暗な部屋でみんなで手をつないでいる時に突然ラッパが鳴ったり不思議な現象がおこったので、霊がおりてきたということになりました。ところが、あれは全部手品師がやっていたんですね。その一番最初にやったフォックス姉妹は、それで何十年もあちこちで、降霊術、要するに霊を呼ぶのを見せて金儲けをしていたんですが、嫌になったんでしょうね。実は霊じゃなかったと告白をしたんです。霊の音とされたものは、彼女たちが膝の関節をポキッと鳴らせていた、その音だったんです。科学者が部屋中を調べてもわからなかったはずです。それで、

告白の講演を始めたんですが客が入らないわけです。そらそうですね。そしたらお金にならないものだから、またインチキの方に戻っていったんです。今でもテレビで紹介されますが、霊と対話したということになっていて、「実は嘘でした」と告白した事実は放送しないんですね。イギリスでは、作家のコナン・ドイルとか、有名な人が降霊術などを研究する英国心霊現象研究協会の会員になっていました。知識人も簡単にだまされるわけです。

それは、近代文明が何もかも科学で解決できるというような風潮に対する反発だったんですね。科学で解明できないものがあるに違いないということですね。それでイギリスで十九世紀にスピリチュアリズムのブームになったんです。ところが時間が経つにしたがって、本格的に調べれば調べるほど、霊を呼ぶという人たちは全部手品師で、トリックを使っていたことがわかってきたわけなんです。それでブームは一旦しぼんだのですが、それが現代でも未だに続いているわけです。面白い見せ物で、本気にするものじゃないんですがね。

確かに、昔から見せ物小屋とかがありました。子どもの時には、そういうものが実際にあるかもしれないと思うけれど、大人になるにしたがって分かるわけですね。本当は違うんだと。ところが現代では、大人になれないんです。子どもの精神のまま大人になっていく。だから、まるで子どものテレビ番組のようなものに大人が夢中になっていて、いつまでも成長することができないということになるんです。

この頃では宗教が、そういうおどろおどろしいもの、オカルトめいたものと結びついて伝えられます。はっきり説明するんですね。「あなたの霊はここへ行って…どうのこうの」と、そう説

明されると、「そうかな」という気持ちになったりします。しかし、本当は違うんじゃないだろうか。我々には全てのものが見えるんだろうか。あの世のことまで見えるんだろうか。見えなければ信じることができないんだろうかと。そのように考えたら、お浄土という世界は実は見ることはできないんですね。確かに経典には書いてある。でも、お浄土を見て帰ってきた人というのは一人もいないわけです。だからこういうテレビの映像で見て何もかも信じる人たちが増えている時代では、浄土という世界を信じることは難しくなってきています。こういう時代には、例えば親鸞聖人の説かれた教えをどんなふうに子供たちに伝えていったらいいんだろうかと考えます。現代に伝えるというのはそういうことですね。

以前は、小さい時にお仏壇に手を合わせていた経験があって、大人になってから「ああ、こういうことだったのか」というかたちで素直に宗教的な環境に入ることができる、心の原風景と申しましょうか、そのような宗教的な環境が失われてくると、テレビやインターネットの圧倒的な情報の前に、教えを伝えることが難しくなってくるんです。そういう時代をどうしたらいいんだろうかと、礼拝堂からずっと西の空を見ていたある時に、「あ、こういうことかもしれないかな」というので書いた文章が実は今日の話のタイトルなんですね。『晴れた日には永遠が見える』という文です。ちょっと読ませていただきます。

『晴れた日には永遠が見える』

シンガポールに行った時の話である。

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

ガイドのリリーさんは街並みの説明をし、街で一番の高層ビルの話をした。

「晴れた日には富士山も見えるんですよ。」思わず身を乗り出す僕たち。リリーさんは笑いながら「冗談ですよ。」と言い、「日本人は本当に富士山が好きなんですね」と、また笑った。

『晴れた日には永遠が見える』という歌がある。On A Clear Day You Can See Forever という原題のその歌は、一九六五年に同名のミュージカルのために作られ、今ではジャズのスタンダードになっている。

空気の澄み切った冬の晴れた日、見晴らしのいい東山の高台に建つ京都女子大学A校舎の礼拝堂の窓から、眼下に広がる京都の街並みと、その向こうに連なる西山を見ていると、何もかもがあまりにも鮮明に見え、山の向こうの空の彼方に、永遠さえも見えそうな気がしてくる。

晩秋の黄昏には、A校舎の窓から見える西の空は刻々と色を変えていく。A306の教室で行う日暮れ時の講義の時間は、私のお気に入りである。西日をいっぱいに浴びて黄金色に輝く教室の、窓の向こうには沈み行く夕陽が見える。夕陽があまりに美しい時は言葉を失うほどだ。

言葉を失っていては講義にならないので、学生たちと一緒に、すっかり沈んでしまうまで黙って夕陽を見ていたことがあった。山の端にかかった夕陽は、驚くほど短い時間で沈んでしまう。

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

夕陽を見ていると、なぜか子どもの頃を思い出す。時間も忘れて外で遊ぶ僕たちに、遊び時間の終わりを告げる夕陽。思い出すのは、その切なさなのかもしれない。そういえば、長く伸びた影法師を見ることもなくなった。ノスタルジアはいつも夕陽とともにある。

西に沈む夕陽は、消えゆくもの、去りゆくものを美しく見せる。そして昔の人は、人生の終焉を沈み行く夕陽に重ね、まだ見ぬ世界を西の彼方に思い描いた。

西方浄土

経典のなかの浄土という世界は、遙か彼方の西方にあると説かれる。もちろん、西と言っても地理上の西というわけではない。地球上を西に進めば、一周して元の場所に戻ってしまうし、宇宙空間を真っすぐ西に進んでも、太陽の周りを公転しながら、自転する地球から見た宇宙の西は、刻々と方向が変わる。

そもそも宇宙空間に出れば、地球上の西という概念も意味を失う。浄土は、私たちのこの世界の概念を超えた世界である。私たちの理屈で理解しようと思えば、西の彼方に浄土があると信じることは難しい。

浄土という世界を私たちの概念で説明することは困難だが、私たちにとっては、方向が示されなければ思い描くことさえ難しい世界だ。

『観無量寿経』には、浄土往生のための方法として様々な行が説かれている。精神集中をして浄土のありさまを思い描き、次にその浄土におられる仏の姿をつぶさに想い描き、そ

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

して自分が浄土へ往生するさまを想い描く。それは観想と呼ばれる行であるが、その最初に日想観という観想が説かれている。

まず西を想いなさいと説かれる。浄土を想い描くためには、まず姿勢を正して西を向いて座り、心を乱さず想いを一点に集中し、まさに沈もうとする夕陽を目に焼き付けて、目を閉じてもその姿が途絶えることなく、はっきりと見えるようにするのである。

続く水想観では、清く澄みきった水を想い、それが氷となり、さらに透きとおった瑠璃の大地となるさまを想い描く。それが浄土の大地である。そのようにして、順に浄土のありさまを想い描いてゆく、その最初に西の方向が示されている。

私たちには、遙か彼方の浄土を実際に見ることはできない。しかし、そのような私たちにもわかるように、私たちの言葉で、私たちの心に説かれたのが、西方にある浄土なのである。その浄土は、私たちの心のなかだけに存在する単なる観念でもなく、私とは無関係にどこかに存在する世界でもない。

人生の羅針盤

私の父は幼くして母親を失った。母親は往生の前日に、「お浄土で待っているよ。ゆっくりでいいから来なさいね。また逢って楽しく話そうね」と言い残した。父の人生において、その言葉がどんなに励みになったことだろうか。父にとって浄土は、観念の世界ではない。母親が待っていてくれる、再び逢える世界が、浄土という世界なのだ。

『真宗文化』第19号平成21年度2010年3月発行（真宗文化研究所）

浄土のある西とは、この「私」が歩む方向であり、涙で見送った私の大切な人が先に人生を終えて旅立った方向なのだ。私がこの人生を一歩一歩あゆむ方向、人生の行方を表すような美しい夕陽が沈む方向が、私にとっての浄土の方向なのだ。

知らない街を歩いている時、街角にある観光地図が私の探している場所を教えてくれる。しかし、目的地を地図に見つけても、地図上の現在地を知ることができなければ目的地への行き方はわからない。この私が今どこにいるのか、どの方向に向いているのかが示されなければ、自分の進む方向は分からない。

経典や仏の教えは、浄土の方向を教えてくれる地図のようなものかもしれない。その地図は、何より私たちが今どこにいるのかを教えてくれる。歩むべき方向も知らずに迷っている私の姿に気づかせてくれる。人生における羅針盤（らしんばん）となり、私たちを導いてくれるのが仏の教えなのである。

西に沈む夕陽を見て人生の終焉を想うことは、今生きているこのいのちを想うことでもある。限りあるいのちを見つめ、この私がどこへ行くのか、いのちの行方を考えることは、この人生においてとても大切なことである。羅針盤も持たず地図さえも持たない人生は、迷いの人生なのである。

この世のいのちを終えると、阿弥陀仏の本願によって、私たちは浄土へ往生すると仏の教えは説く。限りなきいのちの仏となるのである。この人生は夕陽の沈む彼方へと続いている。私たちは、この世での限られたいのちを生きているが、同時に、浄土へ続く道を歩んで

いるのである。

晴れた日の夕方、学生たちが帰った後の夕陽を浴びた教室で、私は飽きることもなく西の空を眺めていた。

という文章です。夕陽を見たら、その彼方に私たちの大事な人たちがおられる世界があるわけです。それは決して地理上の西というわけではない。私たちは見えないけれども、その彼方に浄土という世界を想い浮かべるわけです。それを「見せろ」と言われても見えない世界です、あなたはそれを信じるしかないんですと答えるしかない。それを見せようというのは宗教にとっての間違った方向ではないかと思うわけです。

私たちはいろんな教えやいろんな考え方に出会うことがあります。でも、やはり宗教的な感性というものをやはり大事にしたいと思うわけです。理屈で突き詰めていっても、やはり理解はできるけれどもありがたくない。心が震えるような、ありがたいなという想い、そういう想いを我々が持つのは、そこに宗教的な感性というものがあるからなんですね。その感性は決して理屈で理解できるものではありません。大学で教えていますと、やはり学生が小さい時にそういう経験をしたということが花開く。「あ、こういうことだったんですね」というかたちで素直にそういう世界を受け入れる。そういうかたちで私たちはいろんなものを身につけていく。こうやって今日出会わせていただいたのは、たまたま、偶然かもしれないけども、仏教ではこれを偶然とは言わないんですね。これを〝ご縁〟と言うんです。〝ご縁〟というと何か温かいものが通いま

す。そういう、私たちはさまざまな〝ご縁〟というものに出会っている。その〝ご縁〟の中で我々の宗教的な感性なり、そういう考え方というのを磨いていく。そして私たちが人間として成長していくということが大事ではないかと思うわけです。

私もこうやって今日皆さんに出会えたことがご縁となって、私自身の成長にもなることだと思います。こういうご縁を今日頂けたことを感謝いたします。

どうも、ありがとうございました。